使徒の働き5章17－42節 「御名のゆえの辱めに値する者」

1A 御使いによる脱獄 17－26

1B みことばを語る使徒 17－21a

2B 当惑するする指導者 21b－26

2A 御名を宣べ伝える使徒 27－32

3A 神から出たもの 33－42

本文

使徒の働き 5 章を開いてください。私たちは前回、16 節まで読みました。17 節から入ります。

1A 御使いによる脱獄 17－26

1B みことばを語る使徒 17－21a

17 そこで、大祭司とその仲間たち、すなわちサドカイ派の者たちはみな、ねたみに燃えて立ち上がり、18 使徒たちに手をかけて捕らえ、彼らを公の留置場に入れた。

・・とあります。5 章前半において、主の教会がますます力を持ち、勢いを増している姿が描かれていました。使徒たちは多くのしるしと不思議を行い、人々は心一つにして、神殿の敷地で心一つにして集まっていました。民は、このことに好意を持っていました。形式的になっている神殿礼拝に、息を吹き返すような動きだとみなしていたことでしょう。そして、主を信じる者たちも増えていきました。その勢いはものすごく、ペテロが歩く影だけでも触れられるようにと、大通りに病人が床を広げるということになでなりました。そこで、大祭司やその仲間、サドカイ派の人たちが彼らに手をかけて捕らえたのです。

サドカイ派の人たちは、死者の復活にことをイエスの話にからめて教えていることに腹を立てていたことを、4 章 2 節に書かれていました。けれども、ここではさらに、「ねたみに燃えて立ち上がり」とありますね。

妬みについて、ある人が興味深いことを話していました。人は、大金持ちには妬みを抱かないというのです。むしろ、自分よりもやや金持ちの人を妬みます。例えば、年収億単位の人がいるとします。自分の年収は 500 万円だとします。けれども、700 万円の年収の人がいました。億単位の人ではなく、700 万の人を妬むというのです。そうです、自分よりかけ離れている人は、別の世界の人だとしてあきらめますが、自分よりもやや祝福されている人について、自分と比較して、自分よりも低くなるように抑え込もうとするのです。

激しい反対というのは、実は同じく神を信じる者たち、同じユダヤ人たちから起こっていて、それは妬みからだというのは、これが理由です。聖地旅行に行くと、イエスが死なれ、よみがえられた聖墳墓教会があります。そこで特徴的なのは、キリスト教の教派が所狭しとその教会の中で管理している区画があり、時々、対立や衝突が起こるのです。ある時は、アルメニア派とギリシア正教会が握りこぶしの、文字通りの喧嘩をして、イスラエルの治安警察が止めに入るという事件がありました。福音書の記述と正反対ですね。イエスと宗教指導者の間で騒動が起こり、その間に入ったのがローマ総督です。パウロを巡って騒動が起こった時にも、ローマ兵が間に入りましたが、今は、イスラエル人が我々キリスト者の間に入っているという、皮肉です。

主が、パリサイ派や律法学者に対して厳しかったのは、言い換えると、「仲間」に対する強い批判でした。主と、パリサイ派の間には同じように聖書について、神の力について、御使いについても同じように信じていました。けれども、同じように信じている中で、彼らの中にある頑なな心や高ぶりや、何よりも自己義認について厳しく叱責されていたのです。

私たちが福音の真理で動こうとする時に、聖霊の働きに従って動こうとする時に、反対は、実は内部から来ます。つまり、肉によって刺激を受けて、それで反対する、キリスト者や教会ということが多いです。私の友人の牧師は、開拓伝道の時、ある牧師が誹謗中傷を広げていました。なぜ、そこまでするのか？私も不思議でしたが、やはり、成功しているように見える人に対する、いわゆる同業者の妬みだったのです。

妬みから私たちは離れないといけません。特に、同じ主を信じる者たちについて、食い合うような争いは避けるべきです。「マル 9:38-39 ヨハネがイエスに言った。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようとしました。その人が私たちについて来なかったからです。」しかし、イエスは言われた。「やめさせてはいけません。わたしの名を唱えて力あるわざを行い、そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。」主の名が広められているのですから、共に感謝し、共に喜ぶべきですね。

19 ところが、夜、主の使いが牢の戸を開け、彼らを連れ出し、20「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい」と言った。2a1 彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮に入って教え始めた。

彼らは、ペテロたちを留置所に入れましたが、その物理的な障壁以上に、霊や御使いの力のほうが、優れています。主がみこころとしておられることは、目に見える反対は阻止することはできないのです。後に、ペテロが再び、ヘロデ・アグリッパ一世によって捕らえられる場面が出てきます（12 章）。そこでも、御使いの助けによって脱獄する場面が出てきます。御霊の働きに現れる、主の力は、物理的な要塞を破壊するほどのものなのです。「Ⅱコリ 10:4 私たちの戦いの武器は肉

のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。」

しかし、必ずしも、脱獄されない時もありました。パウロが、カイサリアで幽閉されていましたが、そのまま囚人としてローマに他の囚人と共に引き渡されました。それから、ローマで皇帝の前に出るまで、軟禁状態でありました。そして、パウロは第二テモテを見れば、牢にいて、そのまま皇帝によって死刑にされたことが分かります。

しかし、パウロが閉じ込められたことによって、彼の証しの機会は減ることはありませんでした。カイサリアではローマ総督に対して、またヘロデ・アグリッパ二世に対して大胆に証ししました。嵐の中の船でも証ししました。ローマにいる時は、親衛隊に福音が広がりました。さらに、彼は閉じ込められた部屋の中で、教会に対して手紙を書きました。エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ピレモン書がそうだと言われています。そして、今、言いましたようにテモテ第二も獄中で書きました。「Ⅱテモ 2:9 この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばはつながれていません。」主は、災いから私たちを救い出してくださいますが、災いの中にあっても、それでも、ご自身のみこころを行うということにおいて、救われています。

ここでは、牢から出ましたが、御使いが命じています。「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい」であります。宮の中で、みことばを語ることは、はっきりとしたみこころだったのです。決して反対に妨げられることはないのです。そして、「このいのちのことば」と言っていますね。主が死んだのに、よみがえられたということばです。そして悔い改め、信じる者が、罪赦され、とこしえのいのちを得るということばです。

2B 当惑するする指導者 21b－26

21b 一方、大祭司とその仲間たちは集まって、最高法院、すなわちイスラエルの子らの全長老会を召集し、使徒たちを引き出して来させるために、人を牢獄に遣わした。

先に、ペテロとヨハネが、足なえの男を立ちあがらせた時に、民の指導者たちが一同に会して集まりましたが、同じように、正式に、最高法院（サンヘドリン）として集まり、彼らを裁こうとしました。

22 ところが、下役たちが行ってみると、牢の中に彼らはいなかった。それで引き返して、こう報告した。23「牢獄は完全に鍵がかかっていて、番人たちが戸口に立っていました。しかし、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」24 宮の守衛長や祭司長たちは、このことばを聞くと、いったいどうなることかと、使徒たちのことで当惑した。

まるで、マジックにかかったかのように、どうなっているのか分からず、当惑しています。これは、不信仰な者たちがしばしば抱く、反応です。物理的に説明がつかないことが起こる時に、当惑しま

す。しかし、私たちは聖書を信じています。また、目に見えない神の力を信じています。驚くべきことではありません。

25 そこへ、ある人がやって来て、「ご覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、宮の中に立って人々を教えています」と告げた。26 そこで、宮の守衛長は下役たちと一緒に出て行き、使徒たちを連れて来たが、手荒なことはしなかった。人々に石で打たれるのを恐れたのである。

主の命じられたことを行っていれば、主が必ず、共にいてくださいます。そして、主ご自身が勝利してくださいます。パウロが、リステラという町で福音を語った時のことを思い出してください。人々が煽られて、パウロをなんと石打にしてしまいました。死んだようなので、彼を町の外に引きずり出したら、弟子たちが見ている前で、なんと彼は起き上がりました。しかし、もっと驚くことは彼がその町に戻っていることです。「14:20 しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。」また、石打にあってしまうのかもしれないのに、そこにわざわざ戻って、福音を語ったのです。

彼は数々の苦難を受けましたが、振り返れば、すべての苦難から主は救われました。過去には、ダビデがそうでしたね。彼は命を狙われる人生のほうが長かったのはないか？と思われるほどでしたが、彼は晩年、このように証ししています。「Ｉ列王 1:29【主】は生きておられる。主は私のたましいをあらゆる苦難から贖い出してくださった。」主は、必ず贖い出してくださいます。

そして、彼らは使徒たちに手荒なことをしませんでした。彼らに好意を寄せている人々があまりにも多いので、騒動が起こり、自分たちが石打になってしまうのではないかと恐れたからです。主イエスも、イスカリオテのユダの裏切りがあるまでは、捕えようとしたり、試してきた指導者から守られていました。バプテスマのヨハネが、人からなのか、天からなのかと主が尋ねられた時に、彼らは、「人から出たと言えば、群衆が怖い」と言っています（マタイ 21:26）。

2A 御名を宣べ伝える使徒 27－32

27 彼らが使徒たちを連れて来て最高法院の中に立たせると、大祭司は使徒たちを尋問した。28「あの名によって教えてはならないと厳しく命じておいたではないか。それなのに、何ということだ。おまえたちはエルサレム中に自分たちの教えを広めてしまった。そして、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしている。」

「最高法院」というのが、サンヘドリンと言います。ユダヤ人議会のことです。そして、大祭司ですが、カヤパのことです。彼らが、4 章 18 節で、初めにペテロとヨハネを捕えた時に、イエスの名によって語るな、教えるなと命じていましたが、それをお思い起こさせています。

そして、ここの彼の非難がとてもすばらしいことです。「おまえたちはエルサレム中に自分たちの教えを広めてしまった。」この告発は、栄誉あることです。反対者からそう言われるのですから、逆に嘘はありません。こういうことは、伏せておきたいでしょうが、覆い隠すことができず、認めてしまっているのです。イエスが、聖霊が臨まれると力を受けて、初めにエルサレムにおいて、ご自身の証人になると言われていましたが、その約束がここで実現しています。

次に、「あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしている」とも言っていますね。これは、事実、そうですね。彼こそが、イエスに死刑であると宣言した人物です。そして総督ピラトに対して、十字架を要求した者たちです。彼ら自身が、それを認めていました。ピラトが、「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」と言ったら、「その人の血は私たちや私たちの子どもの上に。」と言いました（マタ 27:24-25）。

そして、ペテロは全くぼかすことなく、五旬節の聖霊の満たし以降、このこと全くを隠すことなく、語りました。（2:23,3:13-15）前回、ペテロとヨハネが、ここに立たせられた時も隠しませんでした（4:10）。もちろん、キリストの十字架は、私たちの罪のゆえでありますが、今、ここには十字架につけるようにした指導者らがいます。その時に十字架を目撃したユダヤ人たちがいるのです。

29しかし、ペテロと使徒たちは答えた。「人に従うより、神に従うべきです。30私たちの父祖の神は、
あなたがたが木にかけて殺したイエスを、よみがえらせました。31 神は、イスラエルを悔い改めさ
せ、罪の赦しを与えるために、このイエスを導き手、また救い主として、ご自分の右に上げられまし
た。32 私たちはこれらのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊も証人で
す。」

ペテロと使徒たちは、あまりにも的確に、また端的に宣言しています。第一に、「人に従うより、神に従うべきです。」ということです。前回、ペテロとヨハネが捕らえられた時にも、神に聞き従うことが、人に聞き従うことよりも、神の御前に正しいことなのだと話しました（4:19）。その時にもお話ししましたが、私たちは、ロマ 13 章にあるように、権威は上から来ていると信じています。だから、良心のゆえに権威に従います。遵法においても、納税においても、正直で、従う模範を、世に対して示さないといけません。けれども、神の命令に対してそれをするなという命令を人が出す場合は、その権威を敬いながらも、主に従うほうを選びます。

ダニエルの三人の友人がそうでした。金の像に拝みませんでした。燃える火の炉に入れられましたが、第四の者が共に三人と火の中にいて、救い出されました。第四の者を、ネブカドネツァルは「神の子」と呼びましたが、イエスご自身です。そしてダニエル自身も、王ダリヨス以外に祈願する者は獅子の穴に投げ込まれるという法令がありましたが、いつもと変わらず、エルサレムに向かって祈りを献げました。主の命令にどんなことがあっても従う時に、主が共におられます。そして、

主が私たちを通して、働いてくださいます。

第二に、彼らは「あなたがたが木にかけて殺した」と言って、すぐに彼らの責任逃れを元に戻しています。ここで、十字架という言葉ではなく「木」という言葉を使っていますが、ローマの十字架であったものの、ユダヤ人の中で律法の中で、「申命 21:23 木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。」とあるからです。聖なる方、正しい方を神に呪われたものとしたという責任を明らかにしています。

そして第三に、そのイエスをよみがえらせたと宣言しています。これまた、サンヘドリンにいる多くのサドカイ派の人たちを怒らせます。第四に、イスラエルが悔い改め、それによって罪の赦しを得るということです。これは、イスラエルのみならず、全世界の人々に神が求められていることが、明らかになっていきます。パウロは、アテネの人たちに対して、神への悔い改めを呼びかけています。第五に、イエスが救い主となり、今は神の右の座に着いておられることです。これは、あらゆる主権、力が主のものとなり、また、すべての名にまさる名が与えられたことを意味しています。

そして最後、第七に、彼らがこれらのことの証人で、聖霊も証人であると言っています。彼らは興味深いことに、自分たちと聖霊の証しを分けています。自分たちについて言うならば、復活したイエスを目撃し、天に上げられたことを見ています。

けれども、聖霊による証言というのはどういうことでしょうか？それは一つに、しるしや不思議を見ているということです。終わりの日に御霊が全ての人に注がれて、老人や夢を見て、若者は幻を見るというようなしるしが伴います。それらをもって、聖霊が証人であり、何も彼らだけの証言に頼っているのではありません。それから、聖霊によってこそ、内的な証明が行われます。心の中で、イエスが来るべき救い主なのだということを知るのは、御霊によることなくしてできません。（Ⅰヨハ 4:13-15）ユダヤ人は、律法にあるように、二人、三人の証人がいて、初めて事実と確認します。ですから、使徒たちによる証言が一つ、聖霊による証言が二つで、これで事実を確認されます。

3A 神から出たもの 33－42

33 これを聞いて、彼らは怒り狂い、使徒たちを殺そうと考えた。

ここの「怒り狂い」という言葉は、「のこぎりで引き切られる」というのが直訳です。同じ言葉を語っているのですが、2 章 37 節ではユダヤ人たちは「心が刺された」とあり、彼らは悔い改めました。みことばは、人の心を確かに指しますが、それはへりくだって、悔い改める心には癒しとなります。ところが、心を強情にしている者にとっては、そのことばは無理やり引き切られる、裁きの言葉となります。それで、強く反対しているのです。7 章で同じ言葉が使われて、ステパノの説教に対して石投げをサンヘドリンの者たちが行い、それでステパノは死にました。

このようにして、聖霊による罪の自覚によって、福音をまっすぐに伝えると強い反応が生まれるのです。へりくだらず、悔い改めようとしない人は、いわれのない誹謗中傷をしたり、物理的な危害を加えようとしたり、完全無視を貫いたりと、人が変わってしまうような反応をします。けれども、悔い改めようとする人たちは、全くその人生が変えられます。

34 ところが、民全体に尊敬されている律法の教師で、ガマリエルというパリサイ人が議場に立ち、
使徒たちをしばらく外に出すように命じ、35 それから議員たちに向かってこう言った。「イスラエルの
皆さん、この者たちをどう扱うか、よく気をつけてください。

ここで、サンヘドリンの判断を変える人物が現れます。ガマリエルという人物です。「パリサイ人」とあるように、サドカイ人たちが怒り狂っている中で、パリサイ派の見方を反映させるような意見を述べます。イエスの復活にまつわる数々の出来事に対して、その不思議やしるしをそのまま、神からのものかもしれないという判断したのです。

彼の名前の意味は、「神は私の味方である」というものです。彼は、聖書以外の文献にも出てくる人物で、パリサイ派の中では、最も有名で尊敬されている律法学者です。そして、使徒の働き 22 章 3 節で、パウロは自分がガマリエルの下で学んだ、彼の学徒であることを明かしています。その彼も、回心した後は、パリサイ派であるから、死者が復活するというのは当然のことであるとし、イエスがよみがえられたことを論証していきます。

36 先ごろテウダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほ
どになりました。しかし彼は殺され、従った者たちはみな散らされて、跡形もなくなりました。37 彼の
後、住民登録の時に、ガリラヤ人のユダが立ち上がり、民をそそのかして反乱を起こしましたが、
彼も滅び、彼に従った者たちもみな散らされてしまいました。

イエスは、ユダヤ人の王として、ローマに逆らっているとして告発されました。それは全くの嘘ですが、バラバという人はまさにそのような罪、反逆や扇動、また殺人の罪を犯していました。その時代、そうした人々をメシアか誰かのように信じさせて、ローマに歯向かわせる者たちは、実際にいました。そして祭司たちは、そうした者たちを取り除かなければ、ローマに我々が潰されてしまうという恐れを持っていたのです。

ここに出てくる事件、テウダがいますが、他に文献がありません。けれども、もう一人、ガリラヤ人のユダについては、紀元 6 年に納税に反対する運動を展開させた人物としての記録があります。福音書でも、納税することは律法にかなうことかどうかをイエスに聞きましたね。ユダヤ人はローマを憎み、その象徴的存在である納税を憎んでいました。

38 そこで今、私はあなたがたに申し上げたい。この者たちから手を引き、放っておきなさい。もしその計画や行動が人間から出たものなら、自滅するでしょう。39a しかし、もしそれが神から出たものなら、彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかすると、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」

ガマリエルは、この道の信者になろうとはしていませんが、理にかなった判断をしています。人からのものであれば、神が自滅させるようにします。神からのものであれば、滅ぼすことができません。現に今、牢屋に入れていたのに、戸が閉まったままで、宮で彼らが教えていたのですから。神からのものであれば、神に敵対するものとなってしまいます。

おそらく、この意見をパウロは、同じサンヘドリンの一員として聞いていたのではないか？と思います。師匠であるガマリエルの助言にも関わらず、彼は激しい迫害者となっていきますが、後に、「26:14 とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。」と主イエスご自身から言われます。つまり、自分の良心には、これは神からのものなのだという承認の印がおされたようなものでした。その良心に対して反対のことをして、自分を痛めているということです。

39b 議員たちは彼の意見に従い、40 使徒たちを呼び入れて、むちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと命じたうえで、釈放した。

議員たちは、ガマリエルの意見には従いましたが、しかし納得していたわけではありません。むちで打って、イエスの名によって語ってはならないと命じて、釈放しています。このむち打ちは、ローマのものではなく、ユダヤ人たちのものです。申命記 25 章 3 節に、「四十までは彼をむち打ってよいが、それ以上はいけない。」とあります。誤って 41 回以上になるのを防ぐためでしょう、彼らの規則では、一回少ない 39 回までとされていました。ローマのような、ガラスや骨の破片などが入ったものではなく、牛の皮でできていました。それでも、過酷な仕打ちであることには変わりません。

41 使徒たちは、御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った。

すばらしいです、使徒たちはむしろ喜んでいます。自分たちの愛する主の栄誉のために、辱められるほどになったのですから。それだけ、御心を行えていることであることが分かり、光栄なことだったのです。主が山上の垂訓で、お語りになっていたことですね。「マタ 5:11-12 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。」彼らは罪を犯してしまい、主が十字架につけられる時は、御名のゆえに辱めを避けていました。しかし今、このような取りに足

りない者たちが、主である方の御名のゆえに辱めを受けるようにされたとして喜んでいるのです。

これは、私たちにとっての挑戦です。そこまで、私たちがキリストの証しを立てることができるでしょうか？迫害がないのは、影響力がないから、単に放置されているのです。けれども、影響力があれば、福音が効果的に伝わっているのであれば、自分たちの変な行動やわがままではなく、イエスの御名のゆえに迫害されることがあるのです。そして、それは光栄なことなのです。「Ｉペテ 4:14-16 もしキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。15 あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、危害を加える者、他人のことに干渉する者として、苦しみにあうことがないようにしなさい。16 しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、このことのゆえに神をあがめなさい。」

42 そして毎日、宮や家々でイエスがキリストであると教え、宣べ伝えることをやめなかった。

「宮や家々で」行っています。おそらくは宮で教えているのには、信者のためもあるでしょうが、伝道のためだったでしょう。まだイエスを自分のメシアとして信じ、受け入れてない人々に聞いてほしいということがあったことでしょう。また、ある程度の人々が集まる格好の場所であったのでしょう。その他、家々で行っていました。後に、会堂自体でも教会として集まっていた形跡も聖書には見えますし（例：ヤコブ 2:2、黙示録 3 章のフィラデルフィアの教会など）、古い文献には、シナゴーグに集まっていたことが書かれています。

教えるのは、信仰者に知識が与えられるために行うこと。宣べ伝えるのは、宣言することです。未信者に主に行っています。しかし、信者であっても宣言は聞いていくべきです。そして、教えの中でイエス・キリストを知り、恵みによって成長します。福音を宣べ伝えることには熱心だったとしても、教えの中で成長しているか？が問われます。教会が福音宣教に熱心でも、それだけでは足りないのです。キリストのかたちに成熟することを目指さないといけないです。

こうして第一段階を迎えた気配がします。エルサレムに主の教えがいっぱいになり、ユダヤ地域に広がっています。ここから、大きなことが起こらなければ、彼らがそれ以上、外に動くことはなかったでしょう。けれども、まず教会に新たな問題が起こるのを許されます。その解決法のために立たされていくのが、ギリシア文化や言語を背景に持つユダヤ人たちの存在です。異邦人との架け橋になっていくような人々です。